思考の扉をたたく

特集：ジャン・ミシェル・ブリュイエール/LFKs
―たった一人の中庭 ［P.06］

不法滞在者やロマ族が暮らす移民キャンプを、アーティスティックな視点で再構成した、展覧形式の演劇『たった一人の中庭』。ガランとした空間に金属製のベッドを一直線に並べたインスタレーション「ダマステスへの道」は、鉄の寝台に合わせて人々の身体を改造した強盗ダマステスの物語（ギリシャ神話）から発想されている。フランスの鬼才、ジャン・ミシェル・ブリュイエール率いるLFKsは、メディアでは報じられない複雑な現実を、観る者の知覚を直接刺激する“体験”へと変換し、提示する……。

特集

ジャン・ミシェル・ブリュイエール/LFKs ――たった一人の中庭

拡大された思考の場

INTERVIEW

ジャン・ミシェル・ブリュイエール
Jean Michel Bruyère

聞き手：相馬千秋
Interviewed by Chiaki Soma

欧州に240ヵ所も点在すると言われる移民キャンプの問題を正面から扱い、批評的に再構成した展示形式の演劇作品『たった一人の中庭』が、本年秋に日本に初上陸する。発表するのは、アーティスト集団LFKsを率いる謎めいたアーティスト、ジャン・ミシェル・ブリュイエール。東京公演に向けて新たなプランを準備中の彼に、いまここで社会問題に正面から向き合うことの意味、また鑑賞者を「思考の場」へと誘う独自の方法論について訊いた。

芸術とアクティビズムの関係性

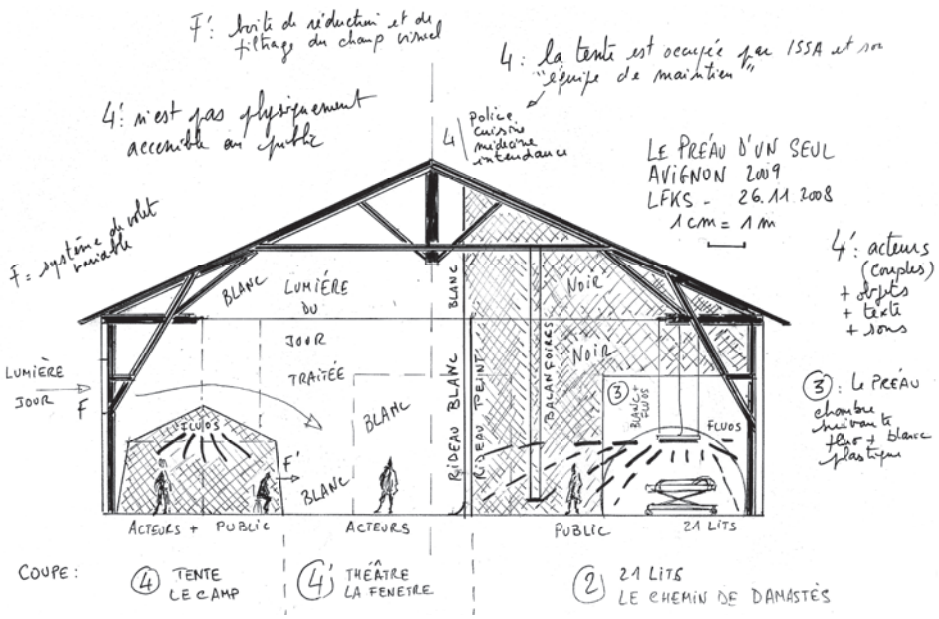
――世界には、あなたの作品が主題とするように、社会の中に歴然と存在しながらも、私たちが見て見ぬ振りをして排除している現実があります。また、その理不尽な現実の渦中にいる人々がいます。彼らは、マイノリティ、弱者、被害者と呼ばれます。こうした人々を、必ずしもそうでない立場の人間が、芸術という枠組の中で表象することについて、どうお考えですか。

「もちろん、これまで私たちが企ててきたあらゆる試みの中で、あるフィクションの中でマイノリティの役を演じて代理表象しようとしたり、彼らの名で彼らの代わりに何かを主張したということは一切ありません。

この問題を巡って私たちが何かを創造する際には、観客（すなわち常に“マジョリティ”に属する人々）が“マイノリティ”という概念を利用したり、普及したりする方法について問い直す機会を持つための状況をつくり出してきました。自称“マジョリティ”は、“マイノリティ”という概念を、支配階級に属する自らの確信を補強するために利用します。結局のところ、“マイノリティ”という概念は“マジョリティ”という概念と同じだけ人工的で怪しいものです。ただ今日、唯一あり得るとすれば“マイノリティ”とは、すべてを統率し、その権限を一人で行使する者だと思います」

ジャン・ミシェル・ブリュイエールとは？

（演出家、映画監督、作家、写真家、造形芸術家、グラフィックアーティスト）
1959年、フランス生まれのジャン・ミシェル・ブリュイエールは、演出家、アクティビストなどの様々な顔を持つ謎の多いアーティストだ。90年代よりセネガルの首都ダカールを拠点にしていたという異色の経歴を持ち、哲学者やデザイナー、俳優などの多国籍で雑多な専門家による集団・LFKsを結成し活動を続けている。数々の国際フェスティバルで上演された『たった一人の中庭』は、観客が空間を自由に歩いて回れる“体感型演劇”とでも呼べる作品だ。



『たった一人の中庭』Point 1

展示会場を余すところなく使い、様々な「思考の場」を用意する。

2009年のアヴィニョン演劇祭で上演された『たった一人の中庭』の展示プラン。画面左側には移民キャンプを想起させるテント、右側には機械式ベッドが設置されている。観客は決められた順路に従い、開館時間内に自由に作品を鑑賞することができる。

F/T12で上演される本作では、ジャン・ミシェル本人の滞在制作を元に、新たな要素が加えられ、新しく生まれ変わった"東京"バージョンの「思考の場」を体験することができるだろう。

――あなたは以前のインタビューで「芸術が世界を変えることは不可能」だとしながらも、「芸術が今日もし重要だとすれば、それは特に政治的責任の問題である」と語っています。あなた自身はかつて、長年アクティビストとしても活動をしていました。そのことと、自分の芸術表現との間に、明確な境界線はありますか。あなたにとっての、芸術とアクティビズムの関係を教えて下さい。

「人間性（ヒューマニティ）を構成する事柄――すなわち芸術と、たかだか100年前にメディアによってつくられた言葉――すなわちアクティビズムを結びつける危険性については、用心深くある必要があるでしょう。最も低いレベル、つまり最も一般的なレベルにおいては、アートとアクティビズムの間には、危険で紛らわしい相似性があります。というのも、芸術には『芸術のための芸術』が、アクティビズムには『行動のための行動』という側面があるからです。

アクティビストは、『何もしないということを拒絶する』目的に達するために行動します。またアクティビズムにおいては、終わりなき行為、行為そのものの本質的価値が重要であり、それ以上の目的はありません。アクティビズムはこうした観点からすればすでに成功した行為の総体なのです。問いと結果の乖離によって、アクティビズムを的確に区別することができるでしょう。もしも、ある行為が具体的な目的を持っていたら、それはアクティビズムではありません。

例えばシリアの反体制派をアクティビストと見なす人はいないでしょう。彼らは、独裁者を退け自由を取り戻すという、極めて明確な目的のために行動しているのです。彼らは目的に到達するまで絶え間ない危険に身をさらしながら行動しますが、彼らはアクティビストではありません。

一方、今年のアヴィニョン演劇祭（註1）では、アサド大統領の独裁と犯罪に対する抗議のために何人かの演劇関係者が集合しました。感動的な告発文を作成した者もいれば、それにいち早く署名した者もいました。そのうち最も栄養状態の良い4、5人は、炎天下のもとハンガーストライキをしてプーチンやイラン、中国に対しての嘆願を行ないました。こうした行為が具体的な結果に結びつく確率は遥かにゼロ以下でしょうが、誰がそんなことを気にするでしょうか？

芸術は、終わりなき手段、まさにそのものです。芸術には終わりがなく、芸術をするということ以外の目的はありません。それゆえ、芸術とアクティビズムは互いに応答し合い、仲がいいように見える、つまり芸術とアクティビズムは一緒に効力を発揮することができるはずだ、というわけです。しかしそれはもちろん幻想に過ぎません。なぜなら本質的な部分、モラル（道徳）がまったく相反しているからです。アクティビズムは道徳を実行する行為ですが、芸術では道徳主義の拒絶以外の何ものでもないのです」

観客を誘いこむ思考の形態（モード）

――『たった一人の中庭』は、一見、強制収容所のイミテーションのようにも見えますし、収容所の再現によって現実を「告発」する作品のようにも見えます。しかし本質は、過去・現在・未来を通じて人間が避けがたく置かれている「生」の諸条件を、緻密に計算されたフィクションとして提示し、そこから人々を「思考の場」へと誘う巨大で有機的な装置であると感じます。

「はい、そのとおりです。この作品は、我々が観客を誘い、入り込ませ、思考させる形態（モード）であり、そこから遠ざかったり、免れたり、回避できるような形態ではありません。こうした形態は、私たちにとって最も日常的な世界の、目に見えない基礎構造なのです。収容所は、私たちの世界が回避したものではなく、私たちが集団で、あるいは個々人でとらわれている世界の隠された本質を成すものなのです」

――4月に日本を訪れた際、哲学者のジャン＝ポール・クルニエ氏や日本人の思想的コラボレーターの方々と一緒に、被災地を訪れました。その体験から、どんなことを考えましたか。

「まず、亡くなった方々への追悼と、すべての被災者の方々へのお悔やみを申し上げます。あなた方と一緒に訪れた被災地では、何キロにも

註1　フランスのアヴィニョンにて毎年7月に開催されている国際演劇祭。演劇、バレエ、コンテンポラリー・ダンスなど様々な演目を観劇しに、世界じゅうから観客が集まる。

『たった一人の中庭』
Point 2
会期中、批評的なアウトプットが行なわれるのもパフォーマンスの一部。

ジャン・ミシェル・ブリュイエールがつくる作品空間では、単に観客が見聞きするパフォーマンスだけが繰り広げられるわけではない。2012年のアヴィニョン演劇祭にて上演された本作は、期間中毎日、パフォーマーらが編集する批評ジャーナルが発行されていた。写真は「政治オフィス」と呼ばれるスペースで、記事の作成からレイアウト、プリントアウトまですべてを行なう様子。F/T12バージョンでは、日本の文脈に即したアウトプットがなされることになる。

わたる津波の爪痕という、あまりに荒涼とした目に見えるものと、立ち入り禁止区域の放射能汚染という、目に見えないものがありました。その二つの現実、二つのドラマ、それに関連するすべてのものが、人間について、深く矛盾したことを物語っていました。

立ち入り禁止区域では、人間という動物が、この地球上に出現してまだ間もないにも関わらず、地球を制御するに至ってしまったということを示していました。たった300万年前に出現した人類が、今や地球を完全に破壊し、自分の子孫や他の生物たちの消滅を望むかどうか決断しようとしている。これはまったく想像を絶することで予想外の進化です。人類は自然の条件から完全に解放されるだろう。人類は知能の行使によって、すべてのものの生と死の権限を獲得してしまった。

津波によって荒廃した海岸線は、そこに残された廃墟や爪痕、残骸によって、現代の日本人がいかに海に隣接した低地に無理に家屋を建設したのかを示していました。そして押し流され、ぐしゃぐしゃになった家屋に対して、流されずにいた家屋のほとんどは残念ながら醜いものでした。そう遠くない過去まで受け継がれてきた日本建築特有の、自然素材を使った天才的な知恵は、何も残らなかった。

問題は、この矛盾した二つの現実の合間に立ち上がります。すなわち人類は、自然の条件や死、麻痺状態から自らを解放する手段を手に入れた。しかしこれらの手段は無償のものではなく、代償を支払わねばならなかった。その代償とは、人間たちが、地上でより人間的な生活をすることを可能にしていたすべてを忘却してしまったことに他ならないのです」

2012年7月20・21日 / 上海にて（メールインタビュー）
翻訳：相馬千秋

『たった一人の中庭』
ジャン・ミシェル・ブリュイエール/LFKs

10月27日（土）～11月4日（日）
於：にしすがも創造舎

報じられない現実から生み出される、ラディカルな思考空間

不法滞在者やロマ族が暮らす移民キャンプ。本作はその実態をアーティスティックな視点で再構成した、展覧形式の演劇だ。

教室から体育館、校庭まで。にしすがも創造舎全体を巡回し、そのパフォーマンスを鑑賞しながら、観客は否が応にも、移民をめぐる諸問題に想いを馳せ、自らの“他者への視線”を意識することになるだろう。日本初上陸。

芸術とアクティビズムは一緒に効力を発揮することができるはずだ、というのは幻想に過ぎないのです

——ジャン・ミシェル・ブリュイエール

宇川直宏

Naohiro Ukawa

メディア・アート・アクティビズムの作法

メディア・アート・アクティビズムとは、マス・プロパガンタ装置が作り上げたケミカルでスペクタクルなこの現実社会に、“リアリズムを煎じた秘伝の漢方”をそれぞれ個々が投入する為の運動である!!!!!! 周到に演出された物語を晒し、極私的な物語素を拡散させる……そう、物語素とは個人史の中で蠢く思考の原液のことであり、エクストリームな想念を意味する!!!!!! ただひたすら有機的に純度の高い物語素を拡散させ、観客に編集を委ね、予定調和を覆せ!!!!!! ホワイトキューブとストリートとサイバースペースが、隣り合わせのレイヤーで“公共”を形作る現代に於いて、濃厚なアウラが立ち籠める現場は、マジョリティもマイノリティをも吸い込んで、自然覚醒したエクストリームな脳内劇場なのだ!!!!!!! エクストリームよ!!! 連帯するな!!! 混沌としたままで提携せよ!!!!!!!!!!! 勿論スポンサーは自分自身だ!!!!!!!!!!!

宇川直宏（現在美術家／DOMMUNE代表）
映像作家、VJ、美術家、グラフィックデザイナー、文筆家。2010年、日本初のUSTREAMライブストリーミングスタジオ兼チャンネル「DOMMUNE」を個人で開局。開局と同時に記録的なビューアー数をたたき出し、国内外で話題を呼び続け、この配信行為を、自らの"現在美術"作品と位置づける。

排除の構造

CRITIQUE

陣野俊史
Toshifumi Jinno

ジャン・ミシェル・ブリュイエールの『たった一人の中庭』を、私はまだ観たことがない。いや、観たことがない、という言い方は正確ではない。体験したことがない、とでも言ったほうがいいかもしれない。動画サイトにアップされていたヴィデオを観るかぎりにおいて、観る側の私たちも相当大きな空間を移動しなければならないし、その意味では体験、という語に相応しいだろう……。その空間の入り口には、「Choisir son camp」と書かれている。「どちらの陣営につくか決めること」という意味のフランス語。だが気になるのは、「お前の陣営を選べ」とも「あなたの陣営はどちらなのか」とも書かれていないことだ。辞書的な意味を守る、ちょっと突き放した言い方ではないか？　この大きく書かれた文字を跨ぐと、奥行きのある空間に並んだ無数のベッドが現れる。白装束の人間が何か作業をしている。それが何なのか、むろん画像をみている私たちにはわからない。

なにか、形のないものに形が与えられている気分だ。Campという語にこだわるならば、それが「陣営」だけではなく「収容所」の意味でもあることに思いは至る。誰かを収容して、見えないようにしている空間をここに再現しているのか。誰かを排除して、抑圧している構造そのものをここに出現しているのか……。問いに答えは与えられないまま、私たちは歩きつづけるしかない。

可視化されるマイノリティ

もし、上に書いたことが大きく外れていないのであれば、『たった一人の中庭』という作品から連想することは無数にあるだろう。私たちの社会が無視して排除している存在を、こんな形で可視化しているのだとすれば。だがそれら・彼らは、ふいに姿を現わすのだ。たとえば、日本では「フランス暴動」と名付けられた2005年秋の出来事。パリ郊外のクリシー・ス・ボワ市に住む二人の、移民系の若者が、職質から逃走し、変電所で死亡した事件だ。この事件をきっかけに三週間ほど、多数の車は焼かれた。夜間外出禁止令も出された。社会学者のジャック・ドンズロはこんなことを書いている……。フランスの社会が経験した2005年11月の暴動を、アメリカが60年代に経験した暴動と単純に比較することはできないだろう。アメリカでは負傷者の数が数千単位だった。死者も多く出た。一方でフランスでは暴動が燃やされた車の数で計算されている。だから深刻さを比較はできない。ただし、程度は違うが似たところはある――。

「若者たち（全員が『可視的マイノリティ』の構成員であって、ここではそのように理解される）の嘆きの種である『統合不全』は、かれらにとっては失業や就職での人種差別で測られるが、それがかつてなく報道で検証され明確にされた。統合不全はまたしばしば、かれらが都市的なものや住宅の面で被る仕打ちをも意味した。すなわち、どこかにまとめて押し込まれ、ときどき別の場所に移動させられるけれども、いずれにしても都市のなかに居場所をもてないという事態のこと、あるいは語源に忠実な意味で『操作』されること、すなわち物として、場所ふさぎな物として扱われるがゆえに撤去され、いちばん邪魔にならないところに――忘れてしまえるという意味

パリのセーヌ川沿いの壁に現れたJRによる写真　©AFP=時事

で――片づけられてしまうという事態のことを意味した」

――『都市が壊れるとき』（ジャック・ドンズロ著、宇城輝人訳、人文書院、2012）

つまり「可視化されたマイノリティ」の若者たちは、社会によって「場所ふさぎな物」として扱われ、その都度、いろんな場所に押し込まれ忘却されてきた、というのだ。彼らの存在を自動車の炎上台数で計測しようとする行為自体、笑止千万でもあるのだが、もし私の推測が正しければ（強引であることを承知のうえで）、『たった一人の中庭』の白で統一された諸事物もまた、彼らの存在の可視化されたイメージといえるのかもしれない。

いや、『たった一人の中庭』はもっと自由に解釈されるべきだろう。「収容所」という語から伸びる線だけではなく、もっと多様な……。なぜならこの作品はアナロジーであるからだ。アナロジー、すなわち「類推」であり「寓話」である。

アナロジーの力

そう書くと、私の脳裡には、フランス暴動以後、もっともその活動が注目されている写真家JRの名前が浮かぶ。ストリートの壁に自分のグラフィティを描くような自称「アーティスト」だったJRは、たまたま拾ったカメラで撮影した写真を引き延ばし、街角や建物、地下鉄などに貼るようになる。むろん非合法の場所にも貼った。貼り付けては剥がされる行為を繰り返した。しかし、いまでは世界中の都市の様々な壁に、依頼された写真を拡大し貼り続けている。そしてこのとき、ある種のメッセージをもった行為として彼の「貼る」行為を進展させたのが、2005年秋の暴動だった。JRはシンプルにこう語る。「芸術は世界を変えることはできない。だが世界の見方を変えることならできる。アナロジーを創りだすことができる」と。

ああ、そうだ。アナロジーの力だ……。『たった一人の中庭』を観て、今、この国に住む人々ならば誰もが類推するようなことを最後に書かねばならないのだろうか。作品に登場する白装束の人々の身にまとっている服が、どう見ても「防護服」のようだ、ということ。排除されてきた、この国特有の構造が、あの白い服によって可視化されているのだ、ということ。あまりに安直な「類推」だろうか。幾分か、その意見は認めよう。ただし、即座にそうした類推が導き出されるほど、私たちは苛烈な日常に放り込まれていることも事実だ。『たった一人の中庭』に、この日常に匹敵するほどの強度があるのかどうか、私たちはリアルに触れてみなければならない。そしてそのとき初めて、作品内と外とが浸透し始めるのだと思う。

陣野俊史（文芸批評家、フランス文学者）
1961年、長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。批評家。ロック、ラップなどの音楽・文化論、現代日本文学をめぐる批評活動を展開。主な著書に『じゃがたら』（河出書房新社、2000）、『フランス暴動 移民法とラップ・フランセ』（河出書房新社、06）、『世界史の中のフクシマ ナガサキから世界へ』（河出ブックス、12）などがある。

収容所は、私たちの世界が回避したものではなく、私たちが集団で、
あるいは個々人で囚われている世界の隠された本質を成すものなのです。

—ジャン・ミシェル・ブリュイエール

photo：『たった一人の中庭』ジャン・ミシェル・ブリュイエール / LFKs